

ドビュッシー歌曲研究の今日的課題 — 音楽学と演奏学の接点を探る —

山本 まり子

1 はじめに

本稿は、クロード・ドビュッシー(Claude Debussy, 1864-1918)の歌曲研究の現状を確認すると同時に、音楽学および演奏学の視座において今日みられる諸課題を指摘することによって、学術的研究成果を活かしたドビュッシー歌曲の演奏機会の拡大に資することを目的とする。

2018年はドビュッシーの没後100年に当たる。そのコモレーションとして国内外で演奏会が多数開催されているが¹⁾、その多くは管弦楽作品とピアノ作品の演奏である。歌曲はそのほとんどがピアノを伴うことから、日本国内ではピアノ作品と組み合わせたプログラミングの中で多く見受けられる一方、歌曲のみに絞った演奏会、あるいは歌曲を網羅的に扱った演奏会の例はほとんど見当たらない²⁾。一体ドビュッシーの歌曲は今日どのように演奏され、また評価されているのか——。ドビュッシーは22歳を目前にした1884年にカンタータ《放蕩息子 *L'enfant prodigue*》でローマ大賞を獲得したが、そこまでの創作初期に歌曲を集中的に作曲している。そして1915年の《家なき子たちのクリスマス *Noël des enfants qui n'ont plus de maisons*》に至るまで生涯を通じてこのジャンルを書き続け、個別に数えて約90曲³⁾の作品を残している。この変遷に鑑みれば、歌曲が創作活動の柱であったことに疑う余地はない。

作曲家のメモリアル・イヤーには、多かれ少なかれ作曲家とその作品への関心が高まるものである。しかしドビュッシーに関して言えば、日本において歌曲の演奏頻度は少ない。主たる原因は、彼を含むフランス歌曲をレパートリーとするプロフェッショナルな演奏家人口がドイツ語やイタリア語等の他言語を扱う人口に比べて圧倒的に少ないことにあるだろう⁴⁾。また、ドビュッシーの最近の歌曲研究の動向が、演奏家および声楽指導者にあまり知られていないことも指摘しなければならない。資料研究に関しては、総じてドイツがフランスより明らかに先行している。ドビュッシーの歌曲演奏の前提として

最重要であるはずの楽譜資料と関連ドキュメントの研究分野は、近年新たな局面を見せているのであるが、詳細な情報が演奏家に行き渡っていないようである。本稿では具体的にこのような現状を明らかにし、進展しつつあるドビュッシーの歌曲研究の成果を、演奏学、すなわち学術的に裏付けられた演奏表現の追究の契機としてもらうことを狙いとしている。

2 ドビュッシーの歌曲創作と研究の現状

2.1 ドビュッシー歌曲創作の概要

ドビュッシーは90曲余りの歌曲のために、19世紀フランスの高踏派、象徴派の詩人たちによる作品を選び出した⁵⁾。彼らは潜在的な心象風景を、フランス語の流れるような韻律とニュアンスに富んだ響きによって喚起する文学作品として結実させていた。ドビュッシーはこうした文学に反応して新たな音楽表現を目指して作曲に勤しんだ。彼の全歌曲中40曲余りは、伝統的な音楽様式を重んじるパリ音楽院の学生時代、すなわち1884年のローマ大賞受賞以前の作品であるが、《牧神の午後への前奏曲 *Prélude à l'après-midi d'un faune*》(1894)で成功を収めて以降はその音楽語法において、近代フランス音楽の新しい方向性を決定づけている。それと同時にドビュッシーは、歌曲において散文詩への志向を強め、新たな音組織を備えた朗唱的歌唱法を顕著に取り入れるようになっていく。

2.2 ドビュッシーの歌曲研究の現状

音楽史上にドビュッシーが残した功績を考えれば、作品研究にも大きな実績が残されていると思われがちである。確かにこの数十年で、ルシュールの評伝(Lesure 2003 およびルシュール 2003)に代表されるようにドキュメント資料に基づく実証的な研究が進みつつあり、歌曲に関しても自筆譜が出版されるなど(Boulez 2011)、若き時代の作品像が次第に明らかになってきた。しかしながら、以下

の項目に挙げる研究の各側面は、ドイツの音楽学研究と比較して進捗のペースが速いとは言い難い。その現状を整理しよう。

2.2.1 楽譜資料

1985年に開始したデュラン Durand 社(現在はデュラン-サラベール-エシーク Durand-Salabert-Eschig社)によるドビュッシーの批判校訂版作品全集の刊行は2018年10月現在、完了していない。全集版の刊行予定⁶⁾によれば、歌曲(mélodies)は第2シリーズ(Série II)に置かれて4巻から成る。しかし既刊なのは、1882年から1887年までの作品を取めた巻として2016年に刊行された第2巻(Rolf 2016)のみである。

批判校訂版楽譜はその学術的性質からそのまま演奏に付すには適さない上、校訂の内容が実用譜に反映されるまでには時間を要することから、ドビュッシーの歌曲を演奏しようとする者が楽譜選択に際して学術的視点が投影された解説を参照するのは困難な状況が続いている。なお、楽器店・書店等を通じて入手可能な実用的出版譜については、次章で述べる。

2.2.2 伝記資料と作品目録

基本資料となるべき伝記資料と作品目録は、ドビュッシー研究の第一人者であったルシュールによる評伝(Lesure 1994)と笠羽映子によるその翻訳書(ルシュール 2003)が最重要と評価されている。ルシュールはその後、継続的な研究成果を加味した伝記の新版(Lesure 2003)を著したが、そこに収載された作品目録(作品表)の最新版は1994年版を訳した笠羽の翻訳書(ルシュール 2003)に反映された。この作品表はドビュッシーの全作品を成立年代順に掲載しているが、歌曲の項目は、詩人や楽譜の状態に関する記載がなく、歌曲研究の観点においては残念ながら不十分である。作品表に関してはMGGの作品表(Kabisch 2001: 583-600)がコンパクトに情報をまとめているものの不正確な記載も認められる⁷⁾。ここで問題なのは、ルシュールによる作品番号(L番号)は1994年版と2003年版で大量に変更されたことである。MGGは1994年版の番号を踏襲しているが、ルシュールの新旧2種類の番号と照合しながら研究を進めるのは不都合であり、その意味においてL番号は現段階では実用的とは言えない。

2.2.3 作品研究

従来のドビュッシーの歌曲研究は、個々の作品に限定して詩と音楽の関係を分析・考察するミクロな視点から

のアプローチ、もしくはフランス音楽史を俯瞰したうえで論じるマクロな視点からのアプローチのいずれかの形で行われてきた。その中で、笠羽映子が《華やかな饗宴 *Fêtes galantes*》第1集を対象に行った研究(笠羽1974)は、各種楽譜資料の関係を詳らかにしながら楽曲分析も緻密になされた、当時としては特筆すべきものである。日本では前者として、詩の構造とドビュッシーの音楽(主に和声)との関係を主題とした金原(2002、2003a、2003b)、金原; 栗原(2003)、栗原(2003)、関野(2010)や、ドビュッシーの詩の選択とその解釈を論じた森上(2008、2017)の論考が挙げられる。

一方、後者のアプローチにおいてドビュッシーは、「ロマンス」から「メロディ」への短い変遷に位置づけられる存在として言及される。古くは、ドイツ歌曲と対置させたルテール(1963)、近年では近代以前のフランス音楽が中心に叙述されているデュフルク(2009)、フォーレ(Gabriel Fauré, 1845-1924)やデュパルク(Henri Duparc, 1848-1933)等に続く存在に位置づけた今谷; 井上(2010)等が挙げられる。

こうした状況下で、ドビュッシーの歌曲全体を包括的に扱ったモノグラフとしては唯一といってよい中村の博士論文『ドビュッシーのメロディの世界』(中村 2009)が公刊された。ドビュッシーの歌曲研究の進捗状況を踏まえつつ各創作期における楽曲分析と考察が行われている⁸⁾。本稿では、以上の先行研究を踏まえて議論を進めている。

3 ドビュッシー歌曲の楽譜出版の現状

そもそもドビュッシーの歌曲は各曲の事情に沿って個別に出版されてきた歴史がある。現在、1882-1887年の作品を取めた批判校訂版(Rolf 2016)以外に、「歌曲集」の形で10曲以上をまとめた楽譜には、出版年順に次の4種類が入手可能である⁹⁾。

a. インターナショナル版

Kagen, Sergius (ed.)

1961a *43 Songs for Voice and Piano (High)* (No. 1135).
New York: International Music Company.

1961b *43 Songs for Voice and Piano (Low and Medium)*
(No. 1136). New York: International Music Company.

b. 全音版

古沢 淑子(編)

1971a 『ドビュッシー歌曲集1』東京: 全音楽譜出版社.

1971b 『ドビュッシー歌曲集2』東京: 全音楽譜出版社.

c. ドーヴァー版

Benton, Rita (ed.)

1981 *Claude Debussy. Songs 1880-1904*. New York: Dover Publications.

d. ハル・レナード版

Briscoe, James R. (ed.)

1993a *Songs of Claude Debussy. Volume I: High Voice*. Milwaukee, WI: Hal Leonard Corporation.

1993b *Songs of Claude Debussy. Volume II: Medium Voice*. Milwaukee, WI: Hal Leonard Corporation.

aのインターナショナル版は高声用と中低声用として現在も出版されているが、これにはドビュッシーの作曲時の意図と無関係に出版社の都合で移調された楽譜が掲載されている。よって音楽学的観点から編集された楽譜ではない。

日本で音楽学習者および演奏家が最初に手にするのは、bの全音の『ドビュッシー歌曲集1』と『ドビュッシー歌曲集2』であろう。1971年に出版された2巻の楽譜は、作品を個別に数えて第1巻に30曲、第2巻に29曲の計59曲が収められている。平島正郎による歌曲の総論、小松清による歌詞の日仏対訳、そしてドビュッシー作品年表がついた利便性の高い楽譜であることから、日本では定番となり、初版から2018年までの

47年間、印刷ミスの訂正以外は修正されることなく出版され続けている¹⁰⁾。このように早い時点で、まとまった歌曲集の体裁で出版された全音版は、日本国内のみならずヨーロッパでも重宝され¹¹⁾、現在もフランスの大きな楽譜販売店では常時在庫しているとのことで、全音版が世界的にスタンダードな楽譜のようである¹²⁾。

リプリントの出版で知られるcのドーヴァー版は、個別に出版されたドビュッシーの初版楽譜をリプリントしてアンソロジー形式で集めている。よって、もちろん最新の研究成果とは離れた存在となっている。

dのハル・レナード版には第1巻に29曲の歌曲とカンタータ《放蕩息子》のリアの叙唱とアリ

アが、また第2巻に32曲の歌曲が収録されている。ブリスコウの編纂による「クリティカル・エディション」と謳っており、各曲の楽譜のオリジナルソースを明示していることは評価される。

4 「ヴァニエ歌曲集」における異稿と演奏上の問題点

4.1 ドビュッシーによる初期の歌曲創作

ドビュッシーの約90の歌曲のうち40曲は、1884年のローマ大賞受賞以前の作品であることは2.1で述べた。量産の原動力となったのは、ドビュッシーがピアノ伴奏者を務めていた声楽レッスンで出会ったマリー＝ブランシュ・ヴァニエ夫人(Marie-Blanche Vasnier)の存在である。この時期の作品には、フランス歌曲の演奏経験の浅い学習者や声楽家が演奏する機会の多いものが集中している。それというもハイ・ソプラノであったヴァニエ夫人が歌うことを前提としてあつらえられているからであり、複雑な和声語法は見られない。二重唱曲を含めると27曲が彼女のために書かれている(中村 2009: 57)。うち13曲は、一つにまとめて献呈されている(以下「ヴァニエ歌曲集」と略)。1882年初頭、ドビュッシーはヴァニエ夫人の家でヴェルレーヌの詩集『華やかな饗宴 *Fêtes galantes*』を発見した。これを機にヴェルレーヌが歌曲の柱となってくる(ルシュール 2003: 54)。

【表1】マリー＝ブランシュ・ヴァニエに捧げられたシャンソン、メロディ(ヴァニエ歌曲集)

	L 番号 (新 / 旧)	曲名	詩人	作曲年	出版年	改稿に関する註
1	47 / 31	パントマイム Pantomime	ヴェルレーヌ	1883 初め	1926	
2	42 / 28	ひそやかに En sourdine	ヴェルレーヌ	1882/9/16	1944	改稿後《華やかな饗宴》第1集(L.80)第1曲へ
3	43 / 29	マンドリン Mandoline	ヴェルレーヌ	1882/11/25	1890	E1: 1890/9/1(Feuilleton) E2: 1890/11/1(Durand & Schœnewerk) E3: 1905(Durand & Fils) E4: 1907(Durand & Fils)
4	45 / 32	月の光 Clair de lune	ヴェルレーヌ	1882 末	1926	改稿後《華やかな饗宴》第1集(L.80)第3曲へ
5	26 / 21	あやつり人形 Fantoche	ヴェルレーヌ	1882/1/8	1993	
6	50 / 39	死後の嬌態 Coquetterie posthume	ゴージェ	1883/3/31	1983	改稿後《華やかな饗宴》第1集(L.80)第2曲へ
7	49 / 42	スペインのシャンソン Chanson espagnole	ミュッセ	1883 初め	1983	
8	53 / 43	ロマンス(えもいわれぬ沈黙) Romance	ブルジェ	1883/9	1983	
9	54 / 44	音楽 Musique	ブルジェ	1883/9	1983	
10	55 / 45	感傷的な風景 Paysage sentimental	ブルジェ	1883/11	1891	
11	56 / 52	ロマンス(今は春) Romance	ブルジェ	1884/1	1907	
12	58 / 54	アリエルのロマンス La romance d'Ariel	ブルジェ	1884/2	1983	
13	59 / 55	哀惜 Regret	ブルジェ	1884/2	1983	

L番号の旧番号はLesure 1994によるものである。一方新番号は、Lesure 1994の新版(Lesure 2003)に付された作品目録を採用したルシュール 2003(Lesure 1994の笠羽訳)に基づく。

「ヴァニエ歌曲集」は私的な性格を有していたため、一つのみとまとめた歌曲集の形で出版されることはなかった¹³⁾。ただし、《あやつり人形》以外の12曲は個々のピースとして出版され、このうち《マンドリン *Mandoline*》と《感傷的な風景 *Paysage sentimental*》はドビュッシーの生前に世に出ている(【表1】参照)。

4.2 「ヴァニエ歌曲集」の異稿問題

「ヴァニエ歌曲集」の演奏の上で厄介なのは、異稿と複数の出版譜の存在であろう。特に大きな問題なのは、いずれもヴェルレーヌの詩による《ひそやかに》(L42)、《あやつり人形》(L26)、《月の光》(L45)、《マンドリン》(L43)の4曲である。このうち《ひそやかに》《あやつり人形》《月の光》の3曲は、後に歌曲集《華やかな饗宴》第1集(L80)として新たに書き直された。初稿と第2稿の音楽上の相違と問題の程度は個々に異なる。《ひそやかに》と《月の光》では、ヴェルレーヌの同一の詩に第2稿でまったく異なる音楽が付されたのに対し、《あやつり人形》では途中までは同じである。一方《マンドリン》の場合は、自筆譜と1890年以降の4種類の出版譜の計5種類の稿/版において、最後のヴォカリーズ旋律に違いが認められる。

このように、いずれの曲の場合も楽譜によって、たとえ詩とタイトルは同じであっても付された音楽が異なるため、演奏者は楽譜の選択を慎重に行う必要がある。以下、各曲について個別の音楽の様相と問題点を整理する。

(1)《ひそやかに》

ヴェルレーヌの詩に作曲された「ヴァニエ歌曲集」の《ひそやかに》は、稿を改めて《華やかな饗宴》第1集第1曲として取められる際に新たに書き直され、初稿とはまったく異なる音楽が付けられた。

(2)《月の光》

《ひそやかに》とまったく同様に、初稿である「ヴァニエ歌曲集」の《月の光》と第2稿である《華やかな饗宴》第1集第3曲は、音楽的にまったく異なる作品となっている。

(3)《あやつり人形》

「ヴァニエ歌曲集」に含まれる《あやつり人形》の楽譜は自筆譜でのみで存在し、個別に出版されることがなかった。1993年のハル・レナード版が《パントマイム》《ひそやかに》《マンドリン》《月の光》《あやつり人形》の5曲を収録したことを通じて、一般に知られるようになったことになる。

「ヴァニエ歌曲集」収録の初稿は全80小節、他方《華やかな饗宴》にセットされた第2稿は全72小節から成り、両者は第47小節1拍目までは細かいリズム形等を除きほぼ同一であるが、その先は最後まで異なっている。(【譜例1】及び【譜例2】参照) 初稿はB²音を含む高い音域でヴォカリーズが連続し曲を閉じる。むろん、ハイ・ソプラノでメリスマティックなフレーズを得意としていたヴァニエ夫人を念頭に置いての創作であったことは想像に難くない¹⁴⁾。

【譜例1】「ヴァニエ歌曲集」《あやつり人形》より第46-80小節
批判校訂全集版 [Rolf 2016: 21-22] より転載

【譜例2】《華やかな饗宴》第1集第3曲《あやつり人形》より第45-72小節
全音版 [古沢 1971b: 22-23] より転載

The score consists of vocal lines and piano accompaniment. The vocal lines feature French lyrics: "la la la la la la la la en qué - - - te De son beau pi - rate es - pa - gnol Dont un a - mou - reux ros - si - gnol Cla - me la dé - tresse à tuo - te. la - la. un soupçon de sourdine". The piano part includes dynamic markings such as *p*, *dim.*, *pp*, and *glissando*.

(4)《マンドリン》

【表1】に示したように、《マンドリン》の楽譜資料には、「ヴァニエ歌曲集」の初稿以外に1890年から1907年にわたって出版された4種のヴァージョンがある。全集版に初稿として掲載されている楽譜は「ヴァニエ歌曲集」の自筆譜に依拠している。第54小節以降の歌唱声部が高音の連続するヴォカリーズで書かれ、結びの音高はC³音という高いポジションである（【譜例3】参照）。これに対し印刷譜には、1)1890年9月1日に雑誌 *Revue illustrée* の掲載曲として世に出た版、2)同年11月1日に Durand & Schœnewerk 社から出版された版¹⁵⁾、3)1905年の Durand & Fils 版、4)1907年の Durand & Fils 版がある。全音版とハル・

レナード版に掲載された《マンドリン》をこれらと比較すると、2)から採られたものとわかる（【譜例4】参照）。

【譜例3】「ヴァニエ歌曲集」自筆初稿に基づく《マンドリン》第53-71小節
批判校訂全集版 [Rolf 2016: 13] より転載

The score shows a vocal line and piano accompaniment. The vocal line includes lyrics: "en s'éteignant peu à peu. un soupçon de sourdine". The piano part features dynamic markings like *f* and *pp*.

【譜例4】「ヴァニエ歌曲集」出版譜に基づく《マンドリン》第50-70小節
全音版 [古沢 1971a: 29] より転載

The score displays a vocal line and piano accompaniment. The vocal line consists of a long, continuous 'la' note. The piano part includes dynamic markings such as *pp* and *sempre pp*.

4.3 「ヴァニエ歌曲集」の演奏上の問題

前章でも述べたように、ドビュッシーの歌曲の楽譜は全音版が日本だけでなくヨーロッパにも普及している。日本ではもちろん全音版が定番であることから、上記の4曲を演奏に付す際の、楽譜の取り扱い上の注意点を指摘しておきたい。

まず、「ヴァニエ歌曲集」の《ひそやかに》は全音版第1巻に「ドビュッシーの歌曲」との見出しの下にまとめられた15曲の一つとして扱われている。問題は、その曲のタイトルが誤解を招きかねないことであろう。そこでは《ひそやかに》ではなく、目次には「うすら明かりに」という邦題が、また楽譜ページの冒頭には「うす明かりに Calmes dans le Demi Jour (En Sourdine)」と歌詞の出だしが付されている。一方、《華やかな饗宴》(全音版タイトルは「みやびやかな宴 I」)第1集は全音版第2巻に収録されており、そこでのタイトルは目次、楽譜ページともに《ひそやかに》である。2つの《ひそやかに》の楽譜がどのような関係にあるのか解説文がないため、演奏者はそれぞれの楽譜の成立事情を自ら調べて演奏しなければならない。

次に、全音版第1巻の《月の光》(全音版タイトルは「月あかり」)は《ひそやかに》と同様、「ドビュッシーの歌曲」と見出しがついた15曲の一つとして収録されているが、これは「ヴァニエ歌曲集」として書かれた初稿を指している。一方《華やかな饗宴》第1集の第3曲として第2巻に収録された曲は、第1巻とタイトルが統一されている。両者が異稿の関係にあるとの表示はないものの、同一の詩に作曲された別曲と認識できる。

これら2曲に対し、《あやつり人形》は全音版では《華やかな饗宴》第1集第2曲としてのみ取り上げられている。全音版のみを参照すると必然的に《華やかな饗宴》の第2曲を演奏することとなるため、全集版もしくはハル・レナード版に掲載された初稿の存在を認識しておかなければならない。

さらに《マンドリン》の場合は、全音版とハル・レナード版が印刷譜に依拠しているため、高音の連続する初稿を演奏するためには全集版を参照する必要がある。

以上のように、楽譜の選択如何によっては非常に錯綜した状態に陥ることとなる。ドビュッシーの歌曲に関しては音楽学的アプローチが進展途上にあること、そして演奏に直結する楽譜が大きな問題を孕んでいることを演奏者が十分に理解することにより、演奏はより史料批判の成果に裏付けられた説得力のあるものになるはずである。

5 むすび

ドビュッシーの歌曲研究、特に「ヴァニエ歌曲集」の13曲をはじめとする初期歌曲に関する楽譜資料およびドキュメント資料の研究は、大きな進展のさなかにある。それは批判校訂版全集として1882-1887年の歌曲が2016年に出版されたことに象徴されているだろう。しかしながら、この状況が学術研究に裏付けられた演奏の実践、つまり演奏学の視点に必ずしも結びついていないのが現状であると言わざるを得ない。本稿で具体例を挙げて指摘したように、広く普及している実用楽譜が音楽学的アプローチからの資料批判の歩調に追いついておらず、最新の研究動向が一般の演奏者には見えにくいのである。曲によって改稿された経緯が異なるにもかかわらず、曲名だけが独り歩きして、それを頼りに多くの演奏が行われてきた歴史を、ドビュッシーの歌曲に携わる者は知っておくべきではないだろうか。

冒頭で述べたように、フランス歌曲の演奏家人口はイタリアやドイツのそれに比較して格段に少ない。ドビュッシーという大作曲家も例外ではない。今後は、演奏者が研究動向により身近に接することができるよう、参考とすべき指針や啓蒙の機会を音楽学の側からも積極的に提供することが望まれるだろう。広い視野に立った総合的な学術連携によって、作品の本質を浮かび上がらせることが可能となるはずである。

註

¹⁾ 本稿の執筆時点では2018年の演奏回数を集計は行っていない。2019年に入って可能なデータが入手できれば集計したい。最近では生誕150年だった2012年がドビュッシーのメモリアル・イヤーであったため、世界的に記念イベントが活発に展開された。

²⁾ 筆者は2018年5月、作品のタイトルを採って『クロード・ドビュッシー没後100年記念 Apparition 出現』と題する演奏会の企画・運営に携わった(2018年5月10日、東京オペラシティにて開催)。プログラムはドビュッシーの歌曲の全創作年代にわたる38曲で構成されるものであった。

³⁾ 作品の存在が作曲家で指揮者のポール・ヴィダール(Paul Antonin Vidal, 1863-1931)の回想のみで知られる最初期の《月に寄せるバラード *Ballade à la lune*》(1879年頃、詩: アルフレッド・ド・ミュッセ(Alfred Louis Charles de Musset, 1810-1857)を含む。MGGの作品表(Kabisch 2001: 583-600)および Lesure 1994 (笠羽訳における Lesure 2003 に基づく補完版)に掲載された歌曲を個々にばらして数えると、93曲となる。

4) 声楽の学習過程では通常、イタリア歌曲に始まって次第に他の言語を扱うようになる。大半はドイツ語の声楽曲へと進むのが一般的である。フランス歌曲をどの程度取り上げるかは、学習者の資質や適性に加え、指導者の演奏経験に左右されることが多いと思われる。

5) テオドール・ド・バンヴィル (Théodore Faullain de Banville, 1823-1891)、ポール・ブールジェ (Paul Bourget, 1852-1935)、ポール・ヴェルレーヌ (Paul Marie Verlaine, 1844-1896)、シャルル・ボードレール (Charles-Pierre Baudelaire, 1821-1867)、ステファヌ・マラルメ (Stéphane Mallarmé, 1842-1898)等がドビュッシーによって取り上げられた代表的詩人である。

6) デュラン-サラベール-エシーク社の下記のウェブサイト上に、全集版刊行に関するPDFリーフレットが置かれている。

<https://www.durand-salabert-eschig.com/en-GB/Composers/D/Debussy-Claude.aspx>

7) 例えば《忘れられた小唄 *Ariettes oubliées*》(L60)においては、《木馬(ベルギー風景) *Chevaux de bois*》の記載が欠如している。

8) ドビュッシーの歌曲を包括的に扱ったモノグラフという点では画期的な研究であるが、全体として一般的な書式の体裁に従っていないところがみられ、また表記上のミスが散見される。

9) この他、ペータース Peters社は1884年までの9曲を取録した初期歌曲集、《ボードレールの5つの詩 *Cinq Poèmes de Beaudelaire*》、《抒情的散文 *Proses lyriques*》の3種類の楽譜を出版している。なお1992年に、音楽之友社から『新編世界音楽全集 声楽編 27 ドビュッシー歌曲集』が刊行されたが、現在では絶版となっており入手不可能である。

10) 第1巻の最新版は2017年12月25日31刷、第2巻のそれは2018年8月25日の29刷と増刷を重ねている。

11) 日本におけるフランス歌曲演奏の第一人者である武田正雄氏に2018年8月にインタビューしたところによると、1980年代にはフランスを代表する名歌手ジェラルド・スゼー (Gérard Souzay, 1918-2004)、アンサンブルピアニストとして名高いアンリエット・ピュイグ＝ロジェ (Henriette Puig-Roget, 1910-1992)の両氏も全音版を愛用し、彼らの多くの門下生たちもまた全音版で学んでいたという。

12) 武田正雄氏に加え、2018年4月までフランスに20年在住されていた声楽家の中山明美氏が、その経験を2018年8月に語ってくださった。

13) 2011年に自筆譜のファクシミリ版(Boulez 2011)の形で出版された。

14) ヴァニエ夫人のソプラノを念頭に書かれた作品であるが、最近では(2017年12月発売)テノールのジル・ラゴン (Gilles Ragon)がピアノのジャン＝ルイ・アグノエル (Jean-Louis Haguenaer)とともに初稿版で録音したCDが出ている (“Claude Debussy: The Complete Works” Warner Classics 9029.573675)。

15) 全集版 [Rolf 2016: 108-111] は2)のヴァージョンに拠るが、異稿として2016年5月24日の競売により中国での個人所有となった自筆譜に依拠する付録C [Rolf 2016: 128-131]、[Houghton Library所蔵の自筆譜に依拠する付録D [Rolf 2016: 132-135] があり、「ヴァニエ歌曲集」収録の楽譜 [Rolf 2016: 10-13] とあわせて4種類の異稿が収められている。

参考文献

Dufourcq, Norbert デュフルク, ノルベール

1949 *La musique française*. Paris: Larousse.

2009 日本語訳『フランス音楽史(新装復刊)』遠山 一行; 平山 正郎; 戸口 幸策 (訳) 東京: 白水社.

今谷 和徳; 井上 さつき

2010 『フランス音楽史』東京: 春秋社.

Kabisch, Thomas

2001 “Debussy, (Achille-) Claude.” Finscher, Ludwig (ed.) 1994-2007 2ed. *Musik in Geschichte und Gegenwart*. Kassel; et ali.: Bärenreiter / Stuttgart; Wiemar: Metzler: Personenteil 5: 566-640.

笠羽 映子

1974 「ドビュッシーの歌曲研究—《みやびやかな宴》第1集—」『音楽学』22(3): 121-138.

金原 礼子

2002 「ドビュッシーと詩人たち—バンヴィルとブルジェー」『言語文化論集』(筑波大学 現代語・現代文化学系) 60: 55-82.

2003a 「ドビュッシーと詩人たち 歌曲《ボードレールの五つの詩》について」『外国語教育論集』(筑波大学外国語センター) 25: 1-13.

2003b 「ドビュッシーと象徴派詩人たち (1) —ヴェルレーヌ—」『言語文化論集』61: 1-44.

金原 礼子; 栗原 詩子

2003 「ドビュッシーと象徴派詩人たち (2) —ヴェルレーヌ (承前)、ルイス—」『言語文化論集』62: 133-182.

山本 まり子

栗原 詩子

2003 「《あらわれ》と《ためいき》—マラルメとドビュッシーの曲言法について—」『芸術工学研究』6: 7-25.

Lesure, François ルシュール, フランソワ

1994 *Claude Debussy: biographie critique*. Paris: Klincksieck.

2003 日本語訳『伝記 クロード・ドビュッシー』笠羽映子(訳) 東京: 音楽之友社.

2003 *Claude Debussy: biographie critique : suivie du catalogue de l'oeuvre*. Paris: Fayard.

森上 明

2008 「ドビュッシーの歌曲創作におけるヴェルレーヌの位置—《月の光》の改作を中心に」『ムーサ』(沖縄県立芸術大学音楽学研究誌) 9: 55-70.

2017 「ドビュッシーの歌曲に関する一考察—「ヴァニエ歌曲集」を中心に—」『ムーサ』18: 9-17.

中村 順子

2009 『ドビュッシーのメロディの世界』2009年度大阪大学大学院文学研究科博士論文.

ルテール, エヴラン Reuter, Everyn

1963 日本語訳『フランス歌曲とドイツ歌曲』小松 清; 二宮 礼子(訳) 東京: 白水社.

関野 さとみ

2010 「ドビュッシー《ステファヌ・マラルメの3つの詩》(1913)の和声構造」『桐朋学園大学研究紀要』36: 47-73.

山本 まり子

2018 「ドビュッシーの歌曲創作～本日の演奏曲に寄せて～」『クロード・ドビュッシー没後100年記念 Apparition 出現』2018年5月10日 東京: 東京オペラシティリサイタルホール: 4-5.

参考楽譜

Boulez, Pierre (ed.)

2011 *Chansons, recueil de mélodies dédiées à Marie-Blanche Vasnier*. Paris: Centre de documentation Claude Debussy.

Rolf, Marie (ed.)

2016 *Claude Debussy. Mélodies (1882-1887)*. [Œuvres Complètes de Claude Debussy. Série II. Volume 2.] Paris: Durand-Salabert-Eschig.

上記以外は「3 ドビュッシー歌曲の楽譜出版の現状」に記載。

(やまもと まりこ 音楽学)